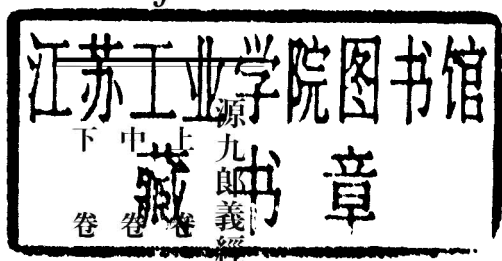


直木三十五全集

9

直木三十五全集

9



示人社

直木三十五全集第9巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行人 東京都文京区水道一―九一―
株式会社 示 人 社

郵便番号 一一二

電話 東京三八二二―四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

装幀 イワサキ・ミツル

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第9巻（昭和9年6月1日発行）を用いた。

第九卷目次

上 卷

父、兄、母

平治の亂

平治の戰

傾く人々

落人行

中 卷

雪嵐

子の母

芽ぐむもの

二

二五

六

九

一四

二〇三

二六

二九

下
卷

鞍馬の木蔭に	二八二
奥州下り	三二一
二つの旗上げ	三四五
二十年	三七二
第一戰	三九五
山川千里	四〇七
見知らぬ兄弟	四三〇
富士川の東西に	四四六
禍根人	四六六
木曾義仲	四八〇
宇治川合戰	四八九
一谷合戰	五〇八

源
九
郎
義
經

上
卷

父、兄、母

郎黨夜話

木枯か、かた／＼板戸へからかつて、木々の梢へ吹き抜けて行つた。

「うむう」

箕矢源五は、脣を歪めて、大きく唸つてから、その分厚の脣についてゐる酒の味を、舌で嘗めたり、脣同志で嘗めたりしながら

「何んぢや、／＼、／＼」

晋頭とるやうに、節をつけて、ゆつくり云ひながら、それに合せて、頑丈な身體を左右に揺すつた。そして、向き合つた爐の前に坐つて、爐の火をみつめてゐる女房の、絶に、微笑の艶々としてゐる臍を向けて、また

「何んぢや、／＼、何んぢや」

「何んぢや、／＼て、思ひ出しても、ぞつと、するではないかの」

女房の心には、何かの不平があるらしく、それが、眉にも、眼にも現れてゐた。源五は、二人の間に坐つて、爐の火へ手をかざしてゐる倅の源六に

「注げ」

と、膝の前の土器をさした。源六が、瓶子から、酒を注

ぐと

「わいらは、かうして、親子水入らずで、のう／＼しとるのを、此世の極樂ぢやと、申しとるが、おいらは、戰場へ出て、叩き合つとるのが、極樂ぢや」

「命のやりとりをして、何が極樂ぢや」

「そりや、わいら戦ぢふもんを存じをらんから、そんなこと、申すのぢや——ま、出てみい、勇ましいもんぢや。何んにも、かんにも、皆忘れてしまつての、おのれの力一杯に——その力の前には、主も、郎黨もない。強けりや勝つ。その勝つた時の、快さと申すもんは、かうして、酒を飲んでどる時よりも、勝戦の晩に、女を抱いて寝るよりも、氣持えゝもんぢや」

「勝つ戦ばかりではござんすまい。主は、負けた時の事を、ちつとも、考へてくれてござらん。負けたら、わしら、どうなるかい？」

「はゝゝゝ、負けた時のこと何んぞ、どんな大將軍でも、考へとるもんかの。勝つ、勝たうと思つて出て行きよる——士臺、かうしてぢやの、毎晩々々、爐の邊で、酒をのんで、おんなじ顔ばかり見とると、飽き／＼して來よつて、戦が、ずんと、戀しくなつてくるもんぢや」

「わしの顔が、見飽きたなら、六條の河原へでも行てござれ。辻君も、たと居らうし、曝し首もあるぢやらう——まあ面白う無いことを云はしやる」

「わいらの顔が見飽きたといふとんぢやない、戦が戀しいと云ふとんのぢや」

「同じ事ぢや」

「ちがふ」

「ちがやせん」

木枯が、又、木を、戸を、揺すつた。

「臂がつめたいの、今夜は——前は、温かいが、えらう底冷えする晩ぢや。かうしとると、しんしん冷えこむのが、爪の先、膝小僧へまでよりわかるが、これが、戦場にをると、野伏せりしとつても、さうつらいとは思はん——どうしてぢやらうなう」

「お前様は、心の底から、冷たう出來てござるのぢやろ。」

何んぼう、頭の殿（源義朝のこと）のお云ひつけぢやとて、現在、頭の殿の、父御（源爲義）の首斬り役にならしやるなど、わしや、何んぼう、世間を狭うしとるか知れやせん」

「前のこと、申すなつ」

源五が、怒鳴つた。

二

どつと、又、木枯が、半部へ叩きつけて行つた。

（見彌陀來迎往生安樂國、臨終正念佛——南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛）

源五は、心の中で、念佛を繰返して、その夜のことに、首の寒さを感じた。何かしら、戸の外の闇に、爲義の亡霊が、突立つてゐるやうに思はれたり、吹き荒ぶ木枯の中に爲義の亡霊が、その眼を怒らせて、狂ひ、躍つてゐるやうにも、思はれた。

七條、朱雀の、淋しい町であつた。松明の灯に、照らし出されてゐる白木の輿の中から

「たばからずとも、よいであらうが、たばからずとも」

と、怒つてゐる心を、力の無い聲に含ませて、ふるへる兩手で、輿の戸を、かたくさせながら、外へ出ようとして、老いた齡からだけではなく、戦に破れた苦勞で、瘦せた膝

を立てて——助かると思つてゐた命が、その家來の手で、今こゝで、失くになると知つた口惜しさと、恐怖に、脚を、ぶる／＼顫はせながら——興丁の置いた草履を、脚のふるへの爲に、足ものせられずに、右へずらしたり、左へずらしたり——

「何んで、有りのまゝを申さんぞ——助からん命なら、助からんでよい——人をたばかりずとも、よいではないか」

鎌田正清が、土の上へ膝と、手とを、突きながら

「勅諭重く候ひまして——頭殿も、再三、お嘆きなされまいたが——」

「誠に、助けん心があらば、我が身に引き代へても、申し宥めやうはあるものぢや。もし、義朝が、わしの許へ、命乞ひに來たならば、わしは、己の命に代へても、義朝を助けてやるぞ。そりや、經文にも、諸佛は衆生を念ずれど、衆生佛を念ぜず、父母は常に子を念ずれど、子は父母を念ぜず、と申しての。子は、命にかけても可愛いが、わしのやうな父は、殺してもよいのぢやろ——わしも、叔父の美濃前司義綱を討つたり、その子三郎義明を討つたり——そ、その報いであらうなう——あきらめた。あきらめた」

ふるへる足を、爪先に、引つかけた草履と共に、踏出し

たが、誰も、顔を上げるものがなかつた。

「何處で斬るぞ——何處で——」

爲義は、興へ手をかけて、蒼白な顔をしてゐた。義朝へ

命乞ひをする爲に、観山西塔の北の谷、黒谷で頭を剃り、

義法房といふ名となつて、その子の義朝を頼んできた爲義

は、その剃り立ての頭を、秋初めの寒い夜風に吹かれながら

「河原か——森か」

秦野次郎近景が

「最後の御念佛遊ばし下されますやう」

と、強い聲で——だが、地へ手を突きながらいふと

「さうか——こ、此處でか——此處で、斬るか——南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、こゝで、斬るのか、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

びつと、眼を閉ちて、口の中で、念佛を唱へてゐる内に、鎌田が、眼で、合圖をした。郎黨が、熊の皮を、興の前へ敷いた。爲義は、その氣配を感じると、眼を開いて

「刻が経つと、難人共が、見物に參るであらう。早う斬れ

——かういふ世の中に、生き延びてをつても、何にならう

か——皆、わしの誤りぢや」

さう云ひつゝ、熊の皮の上へ立つた爲義の眼には、その

子の義朝に對する呪詛と、その家來に對する憎惡とに、燐の閃くやうな凄さがあつた。

「あの眼だ——あの眼が、いつまでも、離れん」

源五は、首を振つた。

爲義は、念佛を申しながら、熊の皮の上へ坐つて

「太刀は？」

と、聞いた。鎌田が

「手前、取りまする」

と、いふと

「よし、心して斬れ——三代相恩の主を討つとて——心、

臆すな」

「はっ」

鎌田が、刀を抜いて、うしろへ廻つた。爲義は

「願諸同法者、臨終正念佛」

と、唱へて、首を延し、眼を閉ぢてゐた。鎌田は、太刀

をもつたまゝ、うつむいてゐたが、一度振り上げかけて、

又、おろすと、眼を閉ぢて、首垂れたが

「源五」

源五は、その時の事を思ひ出すと

（すぐ側に居たのが、悪かつたのだ）

と、いつも繰返して後悔する事を、又繰返して感じた。

鎌田は、源五に、太刀を渡して、眼で

（頼む）

と、云つた。鎌田の心の苦しさが、源五には、よくわか

つてゐた。すぐに、太刀を受けとつて、爲義のうしろへ廻

る。

（早く斬つた方がいゝ）

と、全身に、少しでも早く、壓迫されてゐる氣持から、

人々を放ちたいと感じながら、太刀を振り上げた。

「見彌陀來迎往生安樂國」

と、爲義の云つた時

「御免」

と、叫んだ。

源五は

「主の命ぢや——主の命には、親も討つ、子も殺す」

と、云ふと、腕組をした。

三

「そりや、お主は、大切でござりますとも、けれど、その

大切な主の父親様故」

「武士と申す者は、たゞ、主あるを存じてをればよい。主

あるを知つて、主に主あるを知らず、主の御爲とあらば、御所へも弓を引かうし、平氏の奴原とも争はうし——女の存するものではない。故判官（爲義のこと）を討つたのも、女のせむぢや、女、賢しうして——」

「女のせむとは？」

「常盤のせむぢや」

「何んでござんす？」

「もし、あの時、常盤殿が、判官の爲に、眞實命乞ひをなされたなら、何う變つたかもしれんが——せんだった」

「それは——判官が、常盤殿の袖をお引きなされた事があるからで、ござんせうか」

「さうぢや」

「判官殿は、ま、七八人ものいふ妻を、お持ちなされてをりながら——」

「そりや、おのれら、女子の心から申す言葉ぢや。判官のは、ほんの戯れ言ぢやつたが、女めそれを眞に受けさらして、命乞ひもせんだった故、あんな事になつて——」

源六が

「平氏の謀にのつたと、世上では、申してをりますが」と、いふと

「それもあらう。大きにあらう。平家の清盛と申す奴は、肚ぐるぢやからの。あいつは、叔父の忠正を斬りよつた。そして、わしが、忠正を斬つたから、お前も爲義を斬れと、かう持ちかけて、頭殿を、陥入れたのぢや。それは、明々白々ぢや。不孝者の名を、頭殿に負はして、武家の信頼を薄らがせ、いやが上にも衰へてをる源家を、押し伏せようといふ下心からぢや——上手な口實ぢやなう。頭殿も、清盛が叔父を成敗した上からにや、父と雖も、判官を斬らん譯には、行かんからの」

「それぢや、常盤の罪ぢや、ござりますまいぞな」

「うぬは、又、女の肩をもちよる。假令、さうでも——助からん命でも、常盤から、命乞ひするのが、道ではないか。それにしよらんから、いけんと申すのぢや」

「それなら、わかつてをりまする」

源五は、銚子を、薪の端へのせて、冷えかゝつてきた酒を温めながら

「然し、このまんまでは、治まるまいぞよ、おれは、どうも、近々に、何んかあると思ふがの」

「戦かえ」

「うむ」

「戦も勝つとよいが、敗けると、首が無くなるでなう」と、妻が笑つた。

「いゝや、戦へば勝つ」

源五は、うなづいて

「丁度、清盛めは、熊野詣で、留守ぢやからなう。信西坊主を、からめとつて、六波羅を焼きや、戦は勝ちぢやで」

「さう行くとよいが」

「行く」

「行かんと、どうなるかの」

「行かんでも、前のやうな世の中よりは、ましであらう」

「でも、父者、かういふ結構な世の中には、信西殿がして下さつたのではないか。御所も、新らしいなるし——狐や、化物の住んでゐた所に家が建つし——」

「源氏の世になりやもつとよりなるぞ」

「さうかの」

「信頼殿は、信西よりも、賢い人ぢやからの」

二人が、うなづいた。源五は、酒をのみ干して

「寝るとせう、寒い晩ぢや」

妻と、子とは、爐へ又、薪を投げ入れた。戸や、壁の隙間から、吹込む凍つた風を、かうして防ぐより外になかつ

た。

「どん／＼燃しとけ」

と、源五が、云つてゐる内に、妻は、夜の具を、爐の横へ延べた。

眠れぬ夜

（もつと荒れろ、土も、木も、邸も——天も、地も吹き飛ばしてしまへ）

左馬頭義朝は、高燈臺の灯を消してしまつた部屋の中で、常盤と、同じ夜の具の中に、臥しながら、その滑らかな肌の暖みさへ感じないで、興奮してゐた。

父爲義を斬つて以來、眠れぬ晩が、時々あつたが、この頃は、それがだん／＼と、烈しくなつてきた。父の爲義を、子として斬つた、といふ事にも、その心は、勿論責められたが、それよりも

（清盛に欺かれた）

と、思ふ、無念さ、口惜しさの方が、深かつた。

（日本一の大太はけ、日本一の不孝者）

そんな聲が、木枯の狂風の中に、叫ばれてゐるやうな氣

がした。

(大たはけだとも)

義朝は、その聲へ、懺悔するやうに、心の中で叫んだ。

(父を斬つたのみでなく、父の子を——わしは、己の同胞

を、幾人斬つたか——頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲仲——

何れも、相當物の役に立つ弟共であつたが、わしは、

赦を奉じて、ことごとく斬つた。それが、わしの武將の

武將たる所以、君に二心なき所以を、示したものだと考へ

てをつたが、それを、勅諭とは、表の言葉——ことごとく、

源氏の勢裂かんとする清盛の指金であるらしい——わし

は、いかさま大たはけぢや——何んと罵られうと、うまう

まはかられたのぢや)

義朝は、自分の呼吸が、常盤へかゝつて、その呼吸で、

常盤が、かうして苦しんでゐる心を察するのを恐れでもす

るやうに、ふるへる呼吸を殺して、常盤の頭の方へ、吐き

出しながら、大きい、溜息をついた。

(大きい男子共は、まだよい——何んといふ情の無いこと

を致したか)

自分の小さい子供、乙若、今若などの顔を思ひ出すと、

爲義の末の子の、同じ名の乙若や、次の龜若、鶴若、末の

七つにしかならぬ天王などをまで斬つた事が、悪夢のやうに、頭の中へこびりついて離れなかつた。九歳になる鶴岡は、斬られると知ると

「頭殿へ使を出してくれ。そして、われらを助けおいたなら、郎黨百人の働きをすと申してくれ」

と、云つたし、十一の龜若は

「斬るとは、本當か。誰か一人行つて、頭殿に聞いてきたら」

と、云つたし——たゞ一人、十三になる乙若は

「不覺な、この際に及んで、何んと申す。病んで、出家して年よられた父上でさへ斬る程の下野が、わしらを助けおくものか。一家一族を、かくも失うて、今に我身を亡されんことをも覺えぬ大不覺者。二三年も経つてから、幼いが乙若はよく申したと、思ひ合されんがよい」

義朝は、乙若の言葉に對して

(その通りぢや——その通りぢや、許してくれ。わしの大不覺であつた)

と、うなづくより外に無かつた。

(乙若は、鬼武者(頼朝の綽名)と同じやうに頼もしい奴ぢや)

兄弟が斬られる時、乙若は

「わしから先が順ぢやが、小さいのが、脅えてはならん。

あれから先に」

と、云つて、弟を斬らしておいて、その首を、一々、自分で拭いて、首桶の代りにと人々の持つてきた「ほかい」にのせて——義朝は、その健氣な最期を思ひ出すと

（よくもしたぞ。流石は、源氏の流れぢや。平氏の子らに、それだけの子があらうか）

と、涙をにじませながら、うなづいたが、さうした健氣な子供達を、清盛の策に、手もなくのつて、次々に殺してしまつたかと思ふと

（此奴、討たいでは——）

と、唇を噛まずにはをれなかつた。

二

木枯が、どつと、木の葉を、薙に叩きつけて、吹き狂つた。

常盤は、義朝の腰にかけてゐた手を、そつと引いて、おのれの衣で、義朝の脚を包みながら、義朝の頸の下へ入れてゐた手を抜いて、夜具を押へた。

常盤が、さうして動く、その肌へ擦り込んでゐる香料

が——その衣へ、焚きしめてゐる匂が、ほの暖かいものと共に、義朝の頭へ、血へ、しみ入つた。

常盤は、義朝が眠入つてゐると、思つてゐるらしく、髪を、義朝の胸へ埋めるやうに、押しつけ、脚を押しつけて、

寒い夜を、男の暖かさに縋つた。

（こいつの爲にも、彼奴は——何んとしても、彼奴め、討たずにやおかん）

義朝は、常盤の頭を、抱いて

「お常よ」

と、聲をかけた。

「あい」

常盤は、さう答へると、滑らかな脚で、義朝を捲いて

「お眼覚めでござりますか」

さう云ふと、頸の下へ手を差し入れて、身體を押しつけながら

「ひどい荒れでござります——怖いやうな」

「お主は、わしと、清盛と、どつちが、好きかなう」

「また、そのやうな」

常盤は、左手を、義朝の背へかけて

「寒い」

と、低く云ふと、手も、脚も、身體も、押しつけた。

「清盛の方が、好きであらうがな」

「そんなら、頭殿の許へは、参り申しませぬ」

「参らぬと、わしが、殺すとても、恐れて、命惜しさに、参つたのではないか」

「この殿は」

常盤は、義朝の頸の毛を、つまんで、引つ張つた。

「は、ムム——清盛の事をおもうて、眠れんわい」

「若の三人も産んだ者に、今更らしく、昔のことを申し立てて——」

「いや、そればかりでなうてなう——土臺、清盛と申すのは、男もよいし、わしら東國源氏とちがうて、風流ではあるし——あやつ父の忠盛と申すのが、丁度、わしと、清盛とのやうに——あやつ父は、殿中へ参上しても、公卿や、女官と、歌合せまで出来るし、わしの父は——」

義朝は、そこまで云つて、父爲義について、さつきまで、思ひ出してゐた事を、ふつと考へると——忠盛の幸福さと、父の不運とが、丁度、清盛と、自分との行く末のやうな氣がするし——何かしら、父について話する事は、耐らんやうに、不快な、陰鬱な氣がして来た。

「お父上は、武骨一邊で——でも、武士は、それが——」

「當節の武士は、武骨一邊では通らん。公卿づき合ひの出来る清盛は、出世が早いし、わしは、父と同じやうに、左馬頭は一生左馬頭かも知れん。お主も、あの時、清盛の方へ行つとつたなら、征夷大將軍の女子に成れるかもしれんが、氣の毒ぢやなう」

「成りたるはござりませぬ、お常は、一生賤しいお常でござります」

次の部屋で、赤ん坊の泣く聲がした。それは、乳人と眠つてゐた牛若の聲であつた。

「牛が、眼をさましよつた」

「はい——妾の子は、どうせ牛でござります」

「また申すか」

「申します」

「かうして居ればよいではないか」

「そりや、殿の御恩は忘れませぬが、又しても、雑仕上り、雑仕上りと——それは、賤しい雑仕勤めの、官もなく、位もなく、父母とも、名の無い下賤の育ちではござりますが、かうして、頭の殿のお側女になつた上からは——同じ兄弟でありながら、牛若は、頼朝よりも、卑しい子のやうに

「誰も、卑しいとは申してをりやせぬ」

「いゝえ、鬼武者殿（頼朝の綽名）は、いつぞや、又、難仕が子を生んだ、碌な子はできまいと——殿、これは、我子可愛さに申すのではござりませぬ。もし、成人した曉に、母が卑しいから、同じ同胞でも、牛若は、鬼殿より卑しいとなれば、一門、一族のうちに、また徒黨ができて——」

牛若は、乳母の乳で、泣きやまず、庭の木枯と同じやうに、叫んでゐた。常盤は、枕許の、銀の鈴を振つた。清い、快い音が、響いた。

「はい」

と、宿直の女が答へた。

「牛若が、泣きやまぬなら、連れて参るやうに」

常盤は、さう云つて、錦の襷袋の中から、石を取り出して「灯をつけても？」

「うむ、眠れん——酒もののむか」

と、云ひつゝ、脚を抜き出さうとする常盤の太股を、ぐつと掴んだ。

「痛つ」

「清盛め、お主を取られたんで、口惜しからうの」

「あの方は、そんな、一人の女に、いつまでも、未練をもつ仁ではござりませぬ」

常盤は、半身を立てて、燈臺へ、灯をつけた。はだけた胸、開れた裾、延してゐる腕の色の牙え、線の滑らかさ——（子を産む程、美しうなるし、若うなる、二十にも見えん）と、義朝は、常盤の横顔を眺めてゐた。乳母と共に、泣き聲が、几帳の蔭から、現れてきた。赤い、くちや／＼の顔をした牛若が、小さい掌を握りしめて、何處から、そんな大きい聲が出るかと思ふやうに、泣き、喚いてゐた。

下人恐怖

—

「起きとらんかい。こらつ」

破れた布子をきた父が、子供を、揺すつた。爐の火だけは勢よく燃えてゐたが、家の中は、破れ、裂け、傾き、煤ばんでゐた。

「こんな夜にや、何が起るか、知れんけん」

と、妻がいふと、老母が「酉年の火事の時にや、丁度、こんな風の晩ちやつた」

と、云つて、掌を合せて、何かを拜みながら

「あゝ、有難い事ぢや——倅、有難いことぢや」

「信西殿のお蔭ぢやけん、拜ましやるなら、信西殿を拜ま
しやれ」

「信西殿には、佛がついてござるのぢやろ。あゝ。有難い
事ぢや——火事は、まだよかつたが、病の流行つた時には、
恐ろしかつたの。お前達は、田舎にをつて知るまいが、病
に罹るとなり、どん／＼川原へ持つて行つて、捨てたもの
ぢや。上の人も、夜中までは、見張つとれんで、たうとう
寺町の角に、病人を捨てて小屋が立つての、そこへ、病人
の助からんのは、運んできてよ。泣くしの、どうか連れて
戻つてくれつて、喚くし——したが、さうでもせんにや、
残つてゐる達者な者が、食へんで——しまひには、吉田の山
へ行くと、足腰の立たん年寄が、すてられてをつて、それ
も、流行り出して、年寄ちう年寄は、どん／＼捨てられた
が——わしや、この齡になつても、かうして、疊の上にを
れるのは、倅の孝行と、信西殿のお蔭ぢやで、有難いこと
ぢやと、拜んでをる」

「ひどかつたらしいなう」

と、夫がいふと、女房が

「羅生門の話なんぞ、聞いただけで、ぞつとしたで」

「羅生門にも、お前、盗賊がかかれてゐた頃は、まだよか
つたが——あの上へ、死骸をすてるやうになつてなう」

「死骸から、脂をとつたといふでないか、お婆様」

「脂もとつたし、髪の毛もとつたし、そんな物を盗つて、
暮しとつた人が、多勢居たもん、仕方が無けん」

「お婆さん」

と、主人は、呼びかけて、母の方へ、燃え切つた火を、
掻きやりながら

「あの頃の盗賊は、強かつたてなう」

「そりや、お前、平の將門と申す人の殘黨ぢやで、たゞの
盗賊ではないで、この邊を、夜、松明ともして、のつし／＼
と歩いてござつての。物持ち、馬持ちの家へ、門を毀して、
押込ましやるが、上の人には手のつけやうが無いで——そ
りや、夜になると、もう、狐と、犬の外には、通る者も、
鳴く者も無いで——晩方になると、何處も、かしこも戸
を下ろして、小さく、縮かまつてしまつてをつたもんぢや。
それに、内裏が、又しても焼けるもんで、主上も、えらい
方々も、あつちの鳥羽殿、こつちの高松殿と、あちこちに
ござらして、内裏の跡には、夜はふくろが鳴くし、晝間は、